

註

- ① 両者を一括して、便宜上「東方教会」、Ostkirche, od. Orthodoxie とよぶ。
- ② 東方教会研究書として最もすぐれたものの一つで、プロテスタント側の著作は F. Heiler, *Urkirche und Ostkirche*, 1937 である。
- ③ 日本のキリスト教会では、一般的に東方教会は異質的に見なされ易い。東方教会の研究分野があまりに広く、しかもごく部分的にしか理解されなかったことも原因の一つであろう。大ざっぱにいても、儀式文 liturgie, 聖文書 Hagiographie, ギリシヤ正教・ロシア正教の宗教学 (Konfessionskunde), 教会法, ピザンチン芸術, 画像 Ikonen, 教会建築, 教会音楽, 異端研究, 其の他, ロシア正教のみに関しても、先づスラブ語族の各分野の研究が必要である。従って東方教会研究は、単に西方教会の教文研究の Appendix の如き思想史研究では間に合わないのが当然であろう。
- ④ これらの物語を Romanos (物語詩) という。

(萩原滄恵)

Karl Rahner, *The Church and the Sacraments*, New York, Herder and Herder, 1963, 117 pp. (Original edition "Kirche und Sakramente" Herder, Freiburg. Translated by W. J. O'Hara.)

カトリック教会に於て7つの sacrament を明瞭に説いたのは12世紀半ばのベツルス・ロンバルズスである。しかし教会がそれを7と決定したのは1439年のフィレンツェ會議に於てであった。16世紀にいたって宗教改革が起り改革者たちによって洗礼と聖餐とを除いた5つの sacrament は偽りのものであって sacrament ではないことが主張された。これに対してカトリック教会は再びトレント會議第7回會議に於て7つの sacrament の中のいずれかが真に固有な意味で sacrament でないというものは呪わるべきであるということを確認した。これ以来、カトリック教会は7つの sacrament, プロテスタントは2つの sacrament を守るということになり、それがカトリックとプロテスタントの相異の1つとしていつもあげられるということになった。

sacrament に対する内容理解に於て異なるといえ、プロテスタントも sacrament を重んじることはいうまでもない。キリスト御自身の御言と御業に説教と sacrament によって仕えつつ、神の自由な恵みの使信をすべての人に伝えることが教会に委託された事柄であることをわれわれは承認する。カトリックとプロテスタントとの間に対話がなされるとすれば、この sacrament についての対話も亦たしかに求められるであろう。このことは多くの困難を伴うにちがいないけれども、なされるべき事柄である。

本書は「教会と sacrament」についてのカトリック側の文献であるが、伝統的なカトリックとプロテスタントの sacrament についての宣言に関して深い内容検討を惹起し、エキュメニカルな論議に新しい図式を提供するものである。

著者カール・ラーナーは次のように論じはじめる。

カトリックの大部分の信徒にとっても又神学者にとってもさえも教会と sacrament との関係はあまり明らかではない。一般に知られていることは、sacrament がキリストによって制定され、その執行が教会の基礎をすえた方によって教会に委ねられている故に、教会は sacrament を執行する権能を与えられているということである。この程度以上のことはほとんど考えられていない。一般に sacrament は個人々の救いのための恵みの手段と見なされているが、もし教会と sacrament との関係を上のように見るだけであるならば、教会はただ個人々の救いのための恵みの手段の執行者として、天的財宝の供給者として現われるだけである。人はその財宝を得るために教会に行くがそれらのものが供給されるや否や教会からはなれていく。このようであれば、教会と sacrament との関係は全く表面的外面的なものにとどまっている。教会としての教会と、sacrament の教会としての教会が偶然に同一のものであったというにすぎないことになる。

教会と sacrament の関係はもっと深く認識されなければならない。教会と sacrament、この2つの概念はお互いに光を投げかけ合うものであるはずである。もし人が教会について深い理解を得ようとするならば、sacrament とは一体何かを問うことによってそれが得られるであろうし、又 sacrament についての卓越した理解を得ようとするならば、それは教会とは一体何であるかを考えることによって得られるであろう。

以上のような考え方によって本書は先ず教会とは何であるかという理解から sacrament へという線をひき教会の理解を出発点として sacrament が把握され、第二に教会の本質の生ける成就としての種々な sacrament から教会へという線がひかれ、その結果、教会の本質理解が sacrament を出発点として成し遂げられている。

その内容を挙げると次のようである。

I sacrament の教会としての教会

1. 基本的 sacrament としての教会
2. 教会の sacrament 的構造の説明と7つの sacrament 一般に於けるその実現
3. 基本的 sacrament としての教会との関係に於て見られる sacrament の性質一般

II 教会の本質を成就する行為としての種々の sacrament

個人々の聖別の出来事としての諸 sacrament の教会的側面

1. 一般的考察
2. 聖餐
3. 洗礼
4. 堅振
5. 悔悛
6. 品級
7. 婚姻
8. 終油

カール・ラーナーは教会を先ずこの世に於けるキリストの永続的現在として、それ故真

に基本的 sacrament として見る。そしてこの基本的 sacrament としての教会はすべての sacrament の源泉であるという新しい枠の中で論究をすすめていく。

キリストは終末論的に勝利を得た神の恵みの歴史的にリアルな現在である。神の恵みが歴史の中にキリストによってあらわれたことによって、キリスト御自身は神の贖いの恵みの現在であると同時にそのしるしである。神の救いがキリストによって歴史の中でなされるという点から見ると、キリストは歴史の中に語られた基本的に sacramental な神の言である。そして教会はこの世に於ける決定的な恵みの基本的に sacramental な言即ちキリストの永続的現在である。そして教会はこの世に於けるキリストの永続的現在であるという正にその事実によって基本的 sacrament であり、あらゆる個々の sacrament の源泉である。キリストの故に教会は本質的に sacramental な構造をもつ。この場合 sacrament という概念の“しるし”としての重要性が強調されている。教会に於けるキリストの永続的現在は神が御自身をキリストに於てこの世と同一視するということのしるしであり、又教会はキリストに於てこの世に勝ち給うた神の恵みのしるしである。

基本的 sacrament としての教会はその本質を実現し、その機能を果さなければならない。そして教会の行為は必然的にその中に教会自身の本質の構造を担う。教会の行為は教会の恵みの基本的 sacrament としての性格に従って sacramental である。

教会がこの世に於けるキリストの現在の持続として終末論的に勝利を得た神の恵みの基本的 sacrament である故に、個々人に対する救いの恵みは、彼が積極的に教会と関わりをもつときに与えられ約束される。そして、神の恵みの基本的 sacrament としての教会が個々人に対して行為し活動するときに現われる様々な働きこそ所謂 sacrament と称するものである。この場合、個々の sacrament は教会の本質の個々人に対する様々な現実化の例となる。

sacrament の性質一般、例えば *opus operatum* 為された業としての性質も以上のことから明らかにされる。*opus operatum* は決して信仰に反対する概念ではなく、神が自由な純粋な恵みから歴史的に見える形としての sacrament に於て、個々人への恵み深き招きとされ、信仰を与えることを述べる概念である。sacrament に於ける恵みは信仰を呼びおこすものである。

又、sacrament がキリストによって制定されたものであるということも亦、以上の観点から考察される。カール・ラーナーはこのキリストによる sacrament の制定という問題について最も力をいれ、多くの頁をさいて敘述している。

教会が基本的 sacrament であるという立場からすると、個々の sacrament のキリストによる制度は決して歴史的イエスがそのことについて明確な言葉を語ったということに又その言葉が聖書に見出されるということに基づくものではない。それはキリストが sacramental な性質をもった教会の基礎をおかれたということから来るものでなければならぬ。カール・ラーナーはしかしこのようにして婚姻、品級、終油、堅振などのキリストによる制定を歴史的に証明するに困難な sacrament を教会論的視野から考察している。

又7つの sacrament があるということについても本質的なことは決してその数ではな

く、この数の sacrament によってなされる神の恵みの行為が問題なのである。それ故、sacrament の数についての論争は教会の本質或は神の恵みの行為についての論争に従属するものとなる。

以上のように本書は sacrament についての理解を教会との深いかかわり合いに於て同時に教会についての理解を sacrament との深いかかわり合いに於てとらえている故に、sacrament の問題を論争可能な弾力的な場所においている。しかし、あくまでもカトリックの伝統と歴史の中で語っているために、プロテスタントとの論争ということになると多くの問題を伴うであろう。けれどもわれわれをそのような論争又対話に向って導く手がかりを与えているということとはたしかである。ただわれわれの場合、sacrament について語るには、説教が重要なものとして現われてくるので「教会と sacrament」に「教会と説教—sacrament」という図式が対立することによって論争がはじまるであろう。

(松本芳夫)

Wilhelm Hahn, *Worship and Congregation*, London, Lutterworth Press, 1963, 75 pp.

著者はハイデルベルク大学の実践神学の教授である。しかし同時に教義学、教理史、新約神学の諸分野に於ても深い素養をもち、そのような広汎な学識が礼拝という一点に集中してこれ秀れた書物を生み出したのである。

内容は「われらに対する神の奉仕」と「礼拝に於てわれらが神になす奉仕」の二部に分れる。

第一部の1に於てはマルチン・ルターの説教から出発して、礼拝はわれらに対する神の行為と神に対するわれらの行為の二側面をもつこと、しかしその場合あくまで神の行為が先行的であり、われらの行為はそれに対する応答に過ぎないことを明らかにする。

2に於ては1で述べられた事実から出発して礼拝に於けるキリストの臨在を説く。著者は初代教会の礼拝に目を注ぎつつ、先ず聖礼典に於けるキリストの臨在を説く。初代教会の聖餐式に於て制定語の中にキリストの遺言が復唱された時陪餐者達は信仰に於て十字架のキリストと同時にされたと著者は語る。しかし彼は初代教会の信徒達がその聖餐式に於て臨在を体験したキリストは十字架のキリストであったと同時に復活のキリストでもあったという事実、そしてこの両者は彼らの体験の中で絶対に分離し得ない1つの実在であったという事実を明らかにする。

続いて著者は初代教会の礼拝に於けるキリストの臨在は決して聖礼典だけに限定されるものではなくて、み言の宣教を含めた礼拝の全体について同様のことが言えることを指摘する。その際に注目しなければならないのは、初代教会に於ける説教乃至は説教の素材と目されているところの共観福音書の中に膨大な場所を占めているイエスの受難物語及び復活物語である。それらが初代教会の礼拝の中で声高く朗唱された時、信徒達は十字架と復活のイエスが決して過去の実在ではなくて現在彼らの礼拝のただ中に厳然として立ち給うのを生々しく体験したのであろうと著者は語る。続いて著者は第四福音書に目を移し同様の